

ヒト特異性の認識に関する研究

芳 賀 康 朗

〈要旨〉 本研究は、一般大学生のヒト特異性に関する認識について検討することを目的として、2つの調査を実施した。調査1では、大学生108名に、80種類の心的特性や行動特性に関する記述のヒト特異性を評価させ、評価が高かった記述17項目と低かった記述17項目を選定した。調査2では、ヒト特異性に関する評価は、抽象的概念による内的思考に対しては高く、他個体との社会的行動や個体の生存にかかわる行動に対しては低いことが確認された。また、ヒト特異性を評定する場合、哺乳類動物、特に霊長目動物が比較対象となりやすいことが示された。さらに、チンパンジーとゴリラは他の動物種と比較して明らかにヒトとの類似性が高いと認識されていることがわかった。

〈キーワード〉 ヒト特異性、心的特性、行動特性

問題と目的

わたしたちは日常生活において、「人間らしく生きる」とか「人間らしさを取り戻す」といった言い回しをよく使う。しかしながら、「人間らしさ」とはあまりにも抽象的かつ多義的な概念であり、その表現を使う個人によって意味するところは異なる。多くの場合、人類学、進化生物学、心理学、ロボット工学などの科学的所見というよりも、俗信や教訓などの非科学的信念や素朴な倫理観に基づいて人間らしさを思い描いている可能性が高いと考えられる。さら

に、ヒト以外の動物と比較した上で、ヒト (*Homo sapiens*) という動物の特異性について言及することは稀であろう。

本研究では、人間らしさを、比較心理学および進化心理学の観点から「ヒトのみがもっている心的特性や行動特性、または他の動物と比較してヒトにおいて顕著である心的特性や行動特性」と捉え、「ヒト特異性 (human specificity)」とよぶことにする。そのうえで、ヒト特異性そのものではなく、われわれヒト自身のヒト特異性に対する認識の構造を明らかにすることを目的とした。

ヒト特異性については、これまでに進化心理学や進化生物学などの分野で活発な議論が展開されてきた。認知神経科学者の Gazzaniga (2008) は、ヒトは、進化の過程で社会性が増大した結果、倫理観や道徳的感情に特化した心的モジュール、共感能力、他者視点取得能力を獲得したと述べている。比較心理学者の長谷川 (2010) は、ヒトは他個体と公共的な協力体制を敷き、他者の心を読み取る (mind reading) 力に基づいて他個体に教育を施すという2点において、近縁種のチンパンジーと区別されると述べている。そして、他者の心を読み取る力に言語運用能力と時間軸の認識力が追加されたことで、知性はさらに高度化したと推測している。心理学者の Suddendorf (2013) は、ヒトとその他の動物を分け隔てる心的特性として、言語、未来を予測する力、他者の心を読み取る力、知能、文化、道徳性の6つをあげ、そのいずれにおいても入れ子構造を持ったシナリオの構築能力と、他者と心を通わせたいという衝動が認められると述べている。さらに、実験心理学者の鈴木 (2013) は、ヒトをヒトたらしめている特徴として、大きな脳、直立二足歩行、言語と言語能力、道具の作成と使用、火の使用、文化の6つをあげ、直立二足歩行がきっかけとなって、道具の製作や使用、火の使用、意思伝達のための言語使用などの能力が進化したと主張している。

ヒト特異性に関するこれらの進化心理学的考察においては、他個体と社会的な関係を構築して環境に適応することが淘汰圧として作用し、知性の高度化が進んだとする説が一般的である。しかし、このような学説は、いずれも膨大な科学的研究所見から生み出されたものであり、科学的・学問的フィールドに身を置かない一般の人々のヒト特異性に関する認識と一致しているとは限らな

い。動物研究者や動物専門職者でもない限り、複数動物種の比較によってヒトの特徴を浮き彫りにしたり、自らの感情や主観を排除した視点からヒト特異性について俯瞰する機会は少ない。一般の人々の場合、動物観やヒト特異性に関する認識には、先述した非科学的信念に加え、個人の生活環境や被教育経験が関与していると考えられる。この点に関連して、大西・米澤（2009）は、擬人化による解釈、動物飼育経験、動物愛護に関する学習経験などの要因が、動物観の形成に影響を与える可能性を指摘している。

ヒトとそれ以外の動物の心的特性のレベルを比較した研究は少ないが、中島（1992）は、大学生を対象として、60種類の動物の知性を相対評価させている。その結果、知性の評価はいわゆる系統発生的位置に対応していたが、ニホンザルの評価がオランウータンやゴリラよりも高かったこと、イヌとイルカの評価は霊長目動物と同程度に高かったことなどの所見が示されている。吉田・川村（1997）も大学生を対象として、40種類の動物の知能と痛覚について一般大学生に評価を行わせ、いずれにおいてもチンパンジーの評価が最も高いという結果を得ている。

本研究では、一般的な人々のヒト特異性に関する認識を検討する試みの第1歩として、一般大学生を対象として、複数の心的特性や行動特性のヒト特異性を評価させる調査を実施した。調査1では、評価対象となる特性を多数用意し、その中から特にヒト特異性の高い項目と低い項目を抽出することを目的とした。調査2では、調査1で抽出した項目がヒト特異性の認識を調べる上で適切であることを確認することを目的とした。さらに、一般の人々に馴染み深い動物種とヒトとの類似性や共通性を評価させる質問を追加し、ヒトとの類似性に関する認識の特徴についても分析した。

道具使用やコミュニケーション行動のように、客観的に存在する物体や他個体にはたらきかける行動については、ヒト特異性の高低判断は比較的容易であり、評価の分散も小さいと予想される。反対に、信念、想像、感情など、知覚困難で個体差も大きく、擬人化による解釈が入り込む余地の大きい心的特性は、評価の分散が大きくなり、その結果、評定値が高低のいずれかに偏る可能性は小さいと予測される。

調査 1

1. 調査の目的

ヒト特異的と認識されている心的特性や行動特性を明らかにする手始めとして、さまざまな心的特性及び行動特性の記述を大学生に提示し、それらのヒト特異性を5段階で評定させるオンライン調査を行った。ヒト特異性が高いまたは低いと認識されている記述を抽出し、調査2で再度その信頼性を確認することとした。

2. 調査協力者

三重県の私立K大学で2021年度に心理学概論の講義を受講していた1年生から4年生までの学生108名。調査協力者の平均年齢は19.18歳(18歳～24歳)であった。

3. 調査方法および倫理的配慮

調査協力者には授業中に調査目的を説明した上で、Google フォームを用いたオンライン調査への参加を依頼した。回答前には、回答結果は厳重な管理のもとで統計的に処理されること、個人情報保護には最大限に配慮すること、回答したくない質問は無視して構わないこと、調査への参加は任意であることを説明し、承諾を得た。調査では、メールアドレスを含めた回答者の個人情報の収集は一切行わなかった。回答受付期間は2021年7月16日から2021年7月25日までであった。

4. 調査内容

学内ポータルサイトからGoogle フォームのページに誘導し、回答の承諾を得た後に、回答者の属性（性別および年齢）、「ヒトらしさ」について評定させる質問、これまでの動物飼育経験と動物への関心度の高さを尋ねる質問に回答させた。

「ヒトらしさ」について評定させる質問では、ヒトを含む動物の心的特性及

び行動特性に関する記述を提示し、それらがどの程度ヒト特有であるかを、「ヒト以外の動物にもよくあてはまる（1点）」から「ヒトにしかあてはまらない（5点）」までの5段階で評定させた。心的特性及び行動特性に関する記述は全部で80個用意した。これらの記述は、筆者が愛知県内の私立N大学大学院で2021年度に担当した比較心理学の授業で受講生が作成した記述、およびこの授業の参考書であった Suddendorf（2013）と鈴木（2013）の2冊の書籍から選出し、修正を加えた上で用いられた。いずれの記述も、進化心理学や動物行動学を学んだ経験のない大学生にも理解しやすく、長くとも15字程度の簡潔な表現になるように注意して作成された。質問文中に登場する「ヒト」という表現はすべてカタカナで統一し、動物分類上の種名であることを強調した。さらに、調査冒頭の説明文では、質問文中に登場する「ヒト」とは、現在地球に生息している人類のことを指すことを表記した。回答者の負担を考慮して、各項目の評価は、中島（1992）とは異なり、5段階評価の簡便なものとし、ヒトと比較する動物種も指定しなかった。

動物飼育経験についての質問では、自宅における動物飼育経験の有無と飼育期間を尋ねた。選択肢は、「まったくない」、「飼育したことがある（1年未満）」、「飼育したことがある（1年以上5年未満）」、「飼育したことがある（5年以上10年未満）」、「飼育したことがある（10年以上）」の5つであった。

これまでの動物への関心度についての質問では、幼少期に図鑑で動物のことを調べたり、テレビで動物番組を見たり、動物園に遊びに行くことがどのくらい好きであったかを尋ねた。選択肢は、「とても好きだった」、「どちらかといえば好きだった」、「好きでも嫌いでもなかった」、「どちらかといえば嫌いだった」、「とても嫌いだった」の5つであった。

データ解析には、清水（2016）のフリー統計分析ソフト HAD を使用した。

5. 結果

結果の分析は、回答漏れのあった回答者も含め108名全員を対象とした。

80の記述それぞれについて平均評定値を求め、表1に示した。最も平均評定値が高く、ヒト特有の特徴であると認識されていた記述は「お金を使う

(4.95)」であり、最も平均評定値が低く普遍的にみられる特徴と認識されていた記述は「ケンカをする (1.22)」であった。

調査2で使用する記述を選定するために、各記述の平均評定値の平均値(3.03)と標準偏差値(1.04)を再度計算し、その平均値から ± 1 標準偏差値以上離れた項目を抽出した。平均値より1標準偏差値以上大きかった記述(平均評定値が4.06以上)は17項目、平均値より1標準偏差値以上小さかった記述(平均評定値が1.99以下)は17項目であった。これらの合計34の記述を、ヒト特有として認識されている特性、またはヒト以外の動物にも普遍的であると認識されている特性として調査2で採用することとした。

動物飼育経験についての質問では、飼育経験がこれまでにまったくないとの回答は全体の24.77%で、残りの75%以上の回答者は、期間の違いはあるものの、動物飼育経験があることが確認された。飼育経験が1年未満の回答者は11.93%、1年以上5年未満は23.85%、5年以上10年未満は22.94%、10年以上は16.51%であった。

幼少期における動物への関心度を尋ねた質問では、「どちらかといえば嫌いだった」または「とても嫌いだった」との否定的な回答の合計は全体の5.50%のみであった。「とても好きだった」との回答は全体の35.78%、「どちらかといえば好きだった」との回答は38.53%であり、約75%の回答者が幼少期に動物に対して好意的な態度をもっていたことが示唆された。

動物飼育経験と幼少期における動物への関心度についての評定値間の相関を求めたところ、有意な正の相関が認められた($r(107) = .43, p < .001$)。この結果は、動物飼育経験が長いほど、動物に対して好意的な態度をもっていることを示すものである。

ヒト特異性の認識に関する研究（芳賀）

表1 ヒトらしさについての平均評定値（調査1）

項目	平均評定値	項目	平均評定値
<u>お金を使う</u>	4.954	悩む	3.111
神や宗教を信じる	4.889	他個体との関係を気にする	3.103
<u>ペットを飼育する</u>	4.630	決まった時間に食事をとる	3.074
<u>文字を書いたり読んだりする</u>	4.519	病気や怪我を治す	2.954
<u>野菜や果物を育てる</u>	4.407	泣く	2.898
<u>芸術作品を鑑賞する</u>	4.389	二足歩行をする	2.870
<u>衣服を着る</u>	4.389	道具をつくる	2.815
<u>未来や過去について考える</u>	4.370	さまざまな色を知覚できる	2.750
<u>死について考える</u>	4.306	からだの発達に時間がかかる	2.731
<u>火を使う</u>	4.290	身振りやジェスチャーを使う	2.667
<u>言葉を使って考える</u>	4.250	あいさつをする	2.620
<u>自分の本音を隠す</u>	4.213	知能が高い	2.611
<u>時間を気にして生活する</u>	4.167	ダンスや踊りをする	2.565
<u>空想の世界を楽しむ</u>	4.131	他個体の死を悼む（いたむ）	2.500
<u>楽器を演奏する</u>	4.130	道具を使う	2.435
<u>数を数えたり計算する</u>	4.111	いろいろな音を発声できる	2.426
<u>制度や法律をつくる</u>	4.065	手先が器用である	2.389
他個体からの評価を気にする	4.037	プレゼントを贈る	2.370
言葉を話す	4.028	他個体から知識や技術を習う	2.278
文化や文明をもっている	3.963	笑う	2.241
計画を立てる	3.944	暇な時間がある	2.148
装飾品を身につける	3.926	自分を犠牲にして他者を助ける	2.130
食べものを調理する	3.833	他個体に知識や技術をおしえる	2.112
制度や法律を守る	3.796	<u>好奇心が旺盛である</u>	1.981
他個体の気持ちを推測する	3.722	<u>さまざまな感情をもっている</u>	1.907
名誉やプライドを大切にす	3.685	<u>他個体のまねをする</u>	1.889
娯楽や趣味がある	3.602	<u>他個体と協力する</u>	1.889
学ぶ意欲をもっている	3.528	<u>野菜や果物を採集する</u>	1.676
嘘をつく	3.491	<u>他個体を殺傷する</u>	1.673
他個体に共感する	3.453	<u>欲望や本能にしたがって行動する</u>	1.583
理性で欲望をコントロールする	3.444	<u>自分以外の種の動物を狩る</u>	1.565
他個体と自分を比較する	3.421	<u>住居をつくる</u>	1.519
絵をかく	3.407	<u>子どもを育てる</u>	1.389
勉強する	3.352	怒る	1.352
自然を破壊する	3.296	<u>肉を食べる</u>	1.352
歌をうたう	3.262	遊ぶ	1.343
遺体を埋葬する	3.259	<u>集団のメンバーに上下関係がある</u>	1.324
脳が大きい	3.204	<u>野菜や果物を食べる</u>	1.324
恥ずかしがる	3.139	<u>家族や仲間といっしょに生活する</u>	1.287
物々交換をする	3.120	<u>ケンカをする</u>	1.222

下線を引いた34項目は調査2で採用した記述である。

調査2

1. 調査の目的

この調査では、調査1で選定された34の心的特性と行動特性の記述を用いて、改めてヒト特異性に関する大学生の認識について確認することを目的とした。また、ヒト特異性を評定する場合に比較対象となりやすい動物を明らかにするために、ヒト特異性の評定時に思い浮かべた動物の名称を自由記述形式で回答させた。さらに、身近でよく知っている動物とヒトとの間にどの程度共通点があると認識しているのかを調べるために、27種の動物について評定を行わせた。

2. 調査協力者

調査協力者は、三重県の私立K大学で2021年度に調査1とは別の心理学の専門科目を受講していた1年生から4年生までの学生83名。調査協力者の平均年齢は19.37歳（18歳～29歳）であった。

3. 調査方法と倫理的配慮

調査協力者には授業中に調査目的を説明した上で、Google フォームを用いたオンライン調査への参加を依頼した。回答前には、回答結果は厳重な管理のもとで統計的に処理されること、個人情報保護には最大限に配慮すること、回答したくない質問は無視して構わないこと、調査への参加は任意であることを説明し、承諾を得た。調査では、メールアドレスを含めた回答者の個人情報の収集は一切行わなかった。回答受付期間は2021年7月29日から2021年8月10日であった。

4. 調査内容

学内ポータルサイトからGoogle フォームのページに誘導し、回答の承諾を得た後に、回答者の属性（質問1）、ヒトとそれ以外の動物の類似性についての評定（質問2）、ヒト特異性についての評定（質問3）、質問3の解答時に思

い浮かべた動物名（質問4）、これまでの動物飼育経験（質問5）、これまでの動物への関心度（質問6）について回答させた。

質問2では、27種類の動物（哺乳類10、鳥類4、は虫類3、両生類1、魚類4、昆虫類3、クモ、ミミズ）それぞれについて、ヒトとの共通点や類似点がどの程度あると思うかについて、「まったくない（1点）」から「とてもたくさんある（5点）」までの5段階で評定させた。27種の動物は、中島（1992）が行った60種の動物の知能を評定させた研究を参考にして、大学生にとって馴染み深く、名称と異なる動物を思い浮かべる可能性が小さいと思われる動物を、できる限り幅広い動物系統分類から選択した。

ヒト特異性について評定させる質問3では、調査1で選定した34の心的特性及び行動特性の記述について、それぞれがどの程度ヒト特有の特徴であるか、「ヒト以外の動物にもよくあてはまる（1点）」から「ヒトにしかあてはまらない（5点）」までの5段階評定で評定させた。質問文には、調査1ではなかった「解答する際には、あなたが知っている動物のことを思い浮かべながら判断してください」との一文を追加し、回答者がヒトとそれ以外の動物を確実に比較しながら評定することを促した。

質問4では、質問3の評定時に思い浮かべた動物の名称を最高3つまで記入させた。この質問は、ヒト特異性を評定する際に比較対象となりやすい動物を調べるために設定された。

質問5では、調査1と同様に、自宅における動物飼育経験の有無と飼育期間を尋ねた。選択肢は、「まったくない」、「飼育したことがある（1年未満）」、「飼育したことがある（1年以上5年未満）」、「飼育したことがある（5年以上10年未満）」、「飼育したことがある（10年以上）」の5つであった。

質問6では、これまでの動物への関心度を尋ねるために、調査1とは異なり、4つの小問を設定した。問1）幼いとき、動物がのっている図鑑や絵本を見たり読んだりすることが好きだった、問2）テレビやインターネットの動画サイトで動物が登場する番組を見るのが好きだった、問3）動物園や水族館に遊びに行くのが好きだった、問4）小学校、中学校、高等学校で動物のことを扱った授業が好きだった、という記述のそれぞれについて、「まったくあてはまら

ない（1点）」から「とてもよくあてはまる（5点）」までの5段階で評定させた。データ解析には、清水（2016）のフリー統計分析ソフト HAD を使用した。

5. 結果

27種の動物それぞれとヒトとの共通点について評定させた質問2の回答について、動物ごとに平均評定値を算出して図1に示した。最も評定値が低かったのはミミズ（1.52）で、最も高かったのはチンパンジー（4.61）であった。チンパンジーとともにゴリラ（4.20）の平均評定値も突出しており、全体的に哺乳類動物の平均評定値が高かった。動物ごとの平均評定値を1要因の分散分析によって比較したところ、動物種の主効果は有意であった（ $F(26, 2028) = 98.85, p < .001$ ）。多重比較によって、図1で隣接している2種の動物間の平均値をすべて比較したところ、イルカ（3.68）とゴリラの差のみが有意であった（ $MSe = 0.52, p < .05$ ）。この結果から、ゴリラとチンパンジーは他の動物とは明らかに異なり、ヒトとの共通点が多いと認識されているといえる。チンパンジーとゴリラを除く8種類の哺乳類動物の評定値を比較すると、イルカとイヌの評定値が、ネコを除く5種類の動物（ウマ、クジラ、ライオン、ゾウ、ネズミ）よりも有意に高いことが確認された（ $p < .05$ ）。さらには、魚類動物4種（サメ、キンギョ、コイ、メダカ）

のなかではサメの評定値が他の3種よりも有意に高く（ $p < .05$ ）、鳥類動物の4種（カラス、スズメ、ニワトリ、ハト）のなかでは、カラスの評定値が他の3種よりも有意に高いことも確認された（ $p < .05$ ）。

調査1で選定した34の心的特性及び行動特

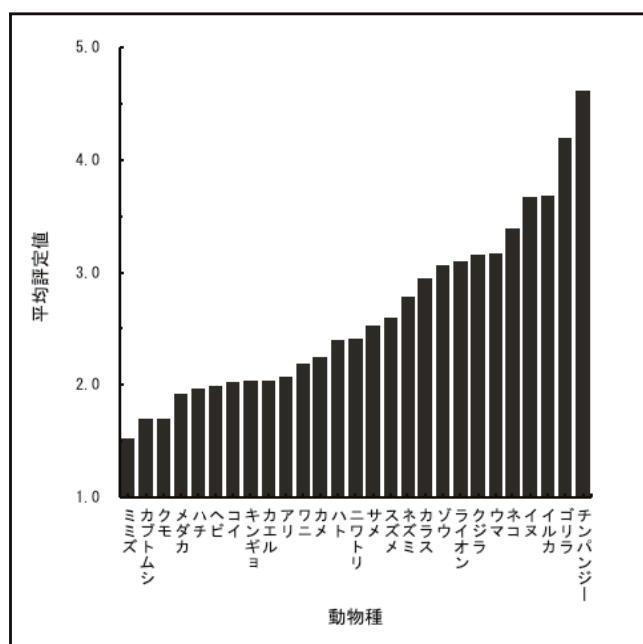


図1 ヒトの共通点・類似点についての平均評定値

ヒト特異性の認識に関する研究（芳賀）

性の記述について、調査2におけるヒト特異性の評定結果を表2に示した。最も平均評定値が高かった記述は「お金を使う（4.83）」であり、最も平均評定値が低かった記述は「子どもを育てる（1.21）」であった。また、調査1と調査2での各記述の平均評定値を t 検定によって比較したところ、有意差が認められたのは「お金を使う」、「数を数えたり計算する」、「自分の本音を隠す」、「好奇心が旺盛である」の4項目のみであった（いずれも1%水準）。次に、調査1と調査2における34の記述の平均評定値の順位について、スピアマンの順位相関係数を求めたところ、その値は.92であり、強い正の相関が認められた。

表2 ヒトらしさについての平均評定値（調査2）

項目	平均評定値	調査1との差
お金を使う	4.831	**
神や宗教を信じる	4.819	
文字を書いたり読んだりする	4.627	
未来や過去について考える	4.602	
ペットを飼育する	4.590	
芸術作品を鑑賞する	4.482	
衣服を着る	4.386	
野菜や果物を育てる	4.301	
制度や法律をつくる	4.289	
空想の世界を楽しむ	4.205	
言葉を使って考える	4.193	
死について考える	4.096	
火を使う	4.084	
時間を気にして生活する	4.000	
楽器を演奏する	3.940	
数を数えたり計算する	3.735	**
自分の本音を隠す	3.735	**
さまざまな感情をもっている	2.072	
他個体を殺傷する	1.807	
他個体と協力する	1.795	
他個体のまねをする	1.759	
野菜や果物を採集する	1.537	
好奇心が旺盛である	1.530	**
住居をつくる	1.506	
家族や仲間といっしょに生活する	1.434	
自分以外の種の動物を狩る	1.434	
団体のメンバーに上下関係がある	1.410	
欲望や本能にしたがって行動する	1.373	
遊ぶ	1.349	
肉を食べる	1.337	
怒る	1.325	
ケンカをする	1.265	
野菜や果物を食べる	1.253	
子どもを育てる	1.205	

** : $p < .01$

ヒト特異性の認識に関する研究（芳賀）

さらに、調査1で選定した34の記述についての調査2での評定値が、ヒト特異性の高い項目群と低い項目群の2つに分離されるか否かを確認するために、因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子数は、固有値の減衰パターン（7.40, 4.46, 1.92, 1.68…）を考慮した結果、2因子が妥当であると判断された。また4つの記述については因子負荷量が.35未満であり、別の5つの記述については2因子のどちらにも.30以上の因子負荷量を示したため、これらの9記述を除外して再度因子分析を行った。回転後の最終的な因子パターンは表3に示した。第1因子には、調査1でヒトらしさの平均評定値が低かった17の記述のうち14記述が含まれていた。第2因子には、調査1でヒトらしさの平均評定値が高かった17の記述のうち11項目が含まれていた。因子間相関は、-.19であった。

表3 ヒトらしさの評定値についての因子分析

項目	第1因子	第2因子	共通性
遊ぶ	.776	.057	.589
肉を食べる	.727	-.174	.607
家族や仲間といっしょに生活する	.632	-.085	.427
子どもを育てる	.630	-.164	.463
団体のメンバーに上下関係がある	.603	-.032	.372
ケンカをする	.569	-.051	.337
欲望や本能のままに行動する	.558	.060	.302
野菜や果物を食べる	.540	-.021	.297
好奇心が旺盛である	.535	.168	.280
住居をつくる	.534	-.065	.303
怒る	.522	-.012	.275
野菜や果物を採集する	.493	.129	.236
他個体と協力する	.492	.170	.239
他個体（他者）のまねをする	.427	.158	.181
空想の世界を楽しむ	.031	.673	.447
衣服を身につける	.115	.669	.432
文字を書いたり読んだりする	-.098	.614	.409
楽器を演奏する	.059	.586	.334
言葉を使って考える	.024	.511	.257
数を数えたり計算する	.147	.499	.243
芸術作品を鑑賞する	.05	.484	.227
火を使う	.043	.470	.215
制度や法律をつくる	-.022	.442	.200
野菜や果物を育てる	-.067	.435	.205
死について考える	-.142	.422	.221
因子間相関		-.190	

以上の分析から、調査1で選定された34記述、または、少なくとも表3に示された25記述は、ヒト特異性を検討するための心的特性及び行動特性の記述として適切なものと考えられる。

質問3の評定時に思い浮かべた動物の名称を回答させた質問4において、回答者が多かったのは、「サル（33名）」、「イヌ（30名）」、「ライオン（30名）」、「チンパンジー（23名）」などの動物であった。回答された35種の動物のうち、半数の17種類が哺乳類動物であり、そのうち5種類がヒトと同じ霊長目動物であった。また、質問2でヒトとの類似性を評定させた27種の動物のうち、14種の動物名が質問4の回答に含まれていた。

動物飼育経験について尋ねた質問5では、飼育経験がまったくないとの回答は全体の26.51%であった。調査1における飼育経験のない回答者の割合は24.77%であったので、飼育経験の有無の比率は調査1とほぼ同じと見なしてよいと思われる。また、5年以上の比較的長期間の飼育経験のある回答者の割合は36.14%に達した。

これまでの動物への関心度を尋ねた質問6における4つの小問間の評定値の相関係数を求め、表4に示した。いずれの相関係数も中程度以上の正の相関を示しており、1%水準で有意であった。

表4 動物への関心度を尋ねた質問間の相関

項目	動物の図鑑や 絵本が好き	動物が登場する 番組が好き	動物園や水族館 が好き
動物が登場する番組が好き	.583 **		
動物園や水族館が好き	.494 **	.568 **	
動物の授業が好き	.732 **	.684 **	.624 **

** : $p < .01$

考察とまとめ

調査1および調査2では、過去に動物飼育経験のある回答者は約75%であり、ヒト以外の動物に対して幼い頃から関心が高く、好意的な態度を抱いている回答者が多かった。また調査1では、動物飼育経験と動物に対する好意度の間に正の相関が認められ、動物飼育経験がない、または短い場合に、動物に対して嫌悪感をいだいている可能性も示唆される。したがって、動物飼育経験とヒト特異性の認識の関係については、改めて検討する意義があると考えられる。

調査1でヒト特異性が高いまたは低いと評価された34の特性については、調査2でもほぼ同様の評価がなされた。ヒト特異性が高いと評価された17項目の中には、抽象的概念を使用した内的思考に関する記述が数多く含まれていた。一方、ヒト特異性が低いと評価された項目の中には、他個体と直接かかわりをもつ社会的行動や個体の生存にかかわる行動が多く含まれていた。

「未来や過去について考える」と「時間を気にして生活する」の2項目は時間にかかわる思考であり、「数を数えたり計算する」と「お金を使う」は数の操作を含む行動である。また、「神や宗教を信じる」、「空想の世界を楽しむ」、「死について考える」のように、自分が直接経験したことのない出来事について想像する思考もヒト特異性の高いものと評価された。さらに、調査1における「文字を書いたり読んだりする」と「言葉を使って考える」の2項目の平均評定値は、「言葉を話す」や「身ぶりやジェスチャーを使う」の2項目よりも高かった。この結果は、他者とのコミュニケーションのための言語使用よりも内的思考のための言語使用のほうが、よりヒト特異性が高い行動と認識されていることを示唆している。

「他個体のまねをする」、「他個体と協力する」、「他個体を殺傷する」、「子どもを育てる」、「遊ぶ」、「集団のメンバーに上下関係がある」、「家族や仲間といっしょに生活する」、「ケンカをする」といった項目は、いずれも同種他個体との相互作用を含んだ行動である。ただし、このような行動はさまざまな動物種で確認される普遍的なものとはいえない。ヒトと同じ哺乳類動物の中にも、ネコ科の動物やクマ科の動物のように単独で生活する動物はいるし、鳥類、爬虫類、

魚類には単独性の動物種は多い。つまり、回答者がどのような動物種を想定してヒト特異性を評定していたのか、調査1の結果からだけでは推測することはできない。

この問題点を解決するために、調査2の質問4ではヒト特異性を評定する際に思い浮かべた動物を尋ねたが、霊長目動物5種類を含む哺乳類動物が数多く想定されていたことが確認された。この結果は、ヒト特異性を評定する場合の比較対象には、系統発生的な位置がヒトと近く、ヒトと同様に他個体と集団を形成して生活する霊長目動物が選ばれやすいことを示唆しているのではないだろうか。

調査2の質問2では27種の動物それぞれとヒトを比較させ、両者の間にどの程度共通点があるのかを評定させた。評定結果は、概して大進化の流れに沿ったものであり、無脊椎動物よりも脊椎動物の評定値が高く、脊椎動物の中でも2種の霊長目動物（ゴリラとチンパンジー）の評定値が突出していた。また、ゴリラとチンパンジーを除く哺乳類8種ではイルカとイヌが、鳥類4種ではカラスが、そして魚類4種ではサメが有意に高い評定値を示した。これらの動物については、どのような特性がヒトと類似していると認識されているのかについて、今後検討する必要がある。

本研究では、ヒト特異性の認識に関わる心的特性と行動特性を明らかにすることを目的とし、2回の調査結果から34項目を選定し、さらに因子分析によって25項目まで絞り込んだ。また、ヒト特異性の評定においては、ヒトの比較対象として霊長目動物や食肉目動物が想定されやすいことが示された。さらに、チンパンジーやゴリラなどのヒト科に属する大型類人猿動物はヒトとの共通性が特に高いと認識されていることも確認された。今後は、ヒトの比較対象となる動物を具体的に特定した上で両者の心的特性および行動特性の差異を判断させる調査を実施し、複数種動物との比較結果を総合的に分析した上でヒト特異性の認識の特徴を明らかにしていきたい。また、動物飼育経験や動物に対する態度などの個人差がヒト特異性の認識に及ぼす影響についても検討する価値があると考えられる。

引用文献

- Gazzaniga, M. S. (2008) . *Human: The Science Behind What Makes Us Unique*. Ecco. (ガザニガ, M. S. (2010). 柴田裕之 (訳) 人間らしさとはなにか? インターシフト)
- 長谷川寿一 (2010) . 長谷川寿一氏に聞く「他者の気持ちが理解できる動物、人間」宇津木聡史 (取材・文) 特集人間らしさって何だろう? Science Window, 2010 冬号, 6-7. 科学技術振興機構
- 中島定彦 (1992) . 動物の「知能」に対する一般学生の評定基礎心理学研究, 11 (1) , 27-30.
- 大西奈央・米澤好史 (2009) . 人間とペット動物の関係性－動物観の構造とその形成過程を探る－和歌山大学教育学部紀要教育科学, 59, 17-26.
- 清水裕士 (2016) . フリーの統計分析ソフト HAD : 機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用方法の提案メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.
- 鈴木光太郎 (2013) . ヒトの心はどう進化したのか－狩猟採集生活が生んだもの－ちくま新書
- 吉田浩子・川村郁香 (1997) . 動物の「知能」、「痛覚」、「人間との関係」に対する一般大学生の評価に関する研究 ヒトと動物の関係学会誌, 2, 74-85.
- Zuddendorf, T. (2013) . *The Gap: The Science of What Separates Us from Other Animals*. Basic Books. (ズデンドルフ, T. 寺町朋子 (訳) (2014) 現実を生きるサル空想を語るヒト－人間と動物をへだてる、たった2つの違い 白揚社)

ヒト特異性の認識に関する研究（芳賀）

A study on recognition of human specificity

Yasuaki Haga

Abstract

The purpose of this study was to investigate the recognition of human specificity among university students, and two surveys were conducted. In Survey 1, 108 university students were asked to evaluate the human specificity of 80 descriptions of mental and behavioral characteristics, and 17 descriptions with high evaluations and 17 descriptions with low evaluations were selected. In Study 2, it was confirmed that the evaluation of human specificity was high for internal thoughts based on abstract concepts and low for social behavior with other individuals and behaviors related to the survival of the individual. The results also showed that mammals, especially primates, were more likely to be compared when assessing human specificity. In addition, chimpanzees and gorillas were clearly recognized to be more similar to humans than other animal species.

Keywords : human specificity, mental characteristics, behavioral characteristics